

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目次

◆私たちの探鳥会自慢

「青森県支部の探鳥会と自然観察会」・・・1

◆ユース観察会・日本野鳥の会栃木で初開催！・・・3

◆トコロジストになろう

「子どもとトコロジスト」・・・5

◆マナー問題の事例

「東京港野鳥公園のミヤマシトドの例」・・・7

◆探鳥会保険集計結果

(2014年4月分)・・・8

◆普及室からのお知らせ

・ツバメのねぐらアンケートを実施しています！・・・10

・新たな『フィールドガイド日本の野鳥』に向けた増補改訂新版の取り組み・・・10

◆今月の購読者数・・・12

◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・13

◆編集後記・・・13

◆私たちの探鳥会自慢

青森県支部から、八戸の探鳥会の特徴や、学校などで行う自然観察会において、気を付けていることについて記事をいただきました。

「青森県支部の探鳥会と自然観察会」

青森県支部の担当地区内で行われる探鳥会は県支部が行うものと、構成地区（むつ、十和田、三沢、八戸）ごとに毎月行う探鳥会があり、年間では55回ほどになります。この他に学校や公民館などで行われる自然観察会がありません。



▲八戸の探鳥会の様子

■八戸の探鳥会

探鳥会の内容は、八戸を紹介したいと思います。

八戸の探鳥会は、毎月第二日曜日の朝7時に行い、終了後に会員の情報を元に鳥が多い場所に移動します。観察会リーダーははっきりと決めていませんが、解説者と鳥や植物などの素材を見つける人、初心者対応などの役割分担が自然と成されています。役割を担う人は職業として何かしらの接客業務経験者であることから、解説を受ける側の気持ちを汲み取りながらの進行が自然とできるのだと思います。

八戸の探鳥会は一見、自由な印象ですが、探鳥会に必要な要素は全て含まれています。観察対象の解説、識別のポイント、季節の鳥情報、道具や装備の解説、植物など目の前の素材や目の前の自然現象の科学的・文化的な解説も行われます。パーソナリティの資質に負う所が大きいのですが、システムティックな観察会にあり

がちな固いイメージを感じることも無く必要十分な探鳥会ができています。

八戸の特徴的な解説手法は、昔話や絵本の紹介でしょう。動物や自然現象を題材とした昔話や絵本の紹介は探鳥会の印象を和らげてくれます。やり過ぎると気恥ずかしい空気感が流れてしましますが、とても印象深い観察会になります。

■学校や公民館などで行う自然観察会

学校や公民館などで行う自然観察会で、意識しているのは資料を与え過ぎないことと、子どもはウソをつくことを念頭に置くことです。子どもも親の世代も資料を手にとるとそれで満足してしまい学習意欲を失ってしまいがちです。その傾向は年々強くなっています。鳥のイラストにあえて名前を入れなかったり、未完成のカード式にして遊びのテイストを盛り込んだり、少し不便にすることも参加者自身が作業を行うことになるので満足感が高くなります。

子どもはウソをつくと書きましたが、スコープを覗く子どもに「見える」と聞くと見えなくても「見ると」答えます。優しい子どもほどウソを付いてしまいます。いえ、ウソをつかせてしまいます。子どもの表情をよく観察することが必要です。感覚的な数字ですが小学4年以下であれば3割近くの子どもの中には見えていないと思います。

ハイアイポイントの接眼レンズほどブラックアウト現象が発生し子どもには見づらいようです。上手く覗けない子には、少し離れたところから接眼レンズを見ると黒いレンズの中に白い点を見つけてもらい、その白い点に片目を近づけるように声をかけると見えることが多いです。

そもそも片目で接眼レンズを覗く行為そのものできない子どもが結構いますので、「子どもの利き目が決まるのはすこし時間がかかるから、来年には見えるかも」などと話しかけるのがいいでしょう。この言葉は先生に聞こえるようにします。そうしなければ「どうして見えないの」「早くしなさい」などの攻撃的、否定的な言葉が出てくるからです。言われた子は、観察会が嫌いになります。実のところ、観察会がきっかけで観察会や生き物、自然が嫌いになった子どもの話を親御さんから聞くことがあります。鳥を観察する以上に参加者を観察すれば防げるからです、心配りを怠らないようにしたいものです。

■探鳥会や自然観察会で伝えたいこと

探鳥会や自然観察会でメインにすべきなのは、「見えているのに見えていない物や自然現象や文化に気づくこと」の面白さ、大切さを意識付けることだと思います。このことを私は「種まき」と呼んでいます。解説者の意気込みが強ければ強いほど、自分が話したいことを話してしまいます。自分が撮った写真を大量に持ち込む人もいるでしょう。しかし、それが目の前の鳥や自然現象を直接示すもので無ければ、唯の知識自慢、写真自慢でしかありません。大切なのは「種まき」であり、解説や資料は手法の1つに過ぎないとの意識が大切なのだと思います。

(青森県支部支部長/関下斉)

青森県支部の担当地区内で行われる探鳥会の種類

探鳥会は、場所と日時を固定する「定点タイプ」と、季節ごとに場所が変わる「移動タイプ」、両方を採用した「両用タイプ」の3種類があります。「定点タイプ」は三沢、「移動タイプ」は県支部とむつ、十和田、「両用タイプ」が八戸で行われています。

定点タイプのメリットは、同じ場所で季節や鳥種の変化を感じられることと、データの積み重ねが出来ること、車などの移動手段を持たない方でも継続的に参加できることが上げられます。気軽に参加しやすく新規入会の機会が多い傾向にあります。

一方、移動タイプは、目的の鳥種や一定の個体数を観察することができ、地域の環境を考える機会が増えます。また、移動には車を利用することや昼食を共にすることが多いので会員間の連携が強まる傾向にあります。しかし、新規の参加者が参加しづらかったり、時間拘束が長く参加しづらい傾向にあります。特に、移動タイプで生まれる連帯感や新規参加者や初心者には疎外感を与えているとの印象を受けます。

◆ユース観察会・日本野鳥の会栃木で初開催！

*2月11日、栃木の副代表手塚さんが、東京が行っている Young 探鳥会を訪れました。その3ヶ月前に行われた連携団体総会の場で、東京の Young 探鳥会の事例を聞き、ぜひ栃木でも開催しようと、20~30代の若い会員を連れて来ていたのでした。

その後、若者たちを何とか活性化したいという手塚さんと、同世代で生きものを見て楽しむような場が欲しいと思っていた若い会員たちが一緒になり、栃木で初となる若者を対象とした自然観察会「ユース観察会」が開催されました。

「探鳥会」ではなく、「観察会」という名称は、鳥に限定しないことで生きものに関心のある多くの人に参加していただくという思いから。当日は東京の Young 探鳥会の担当者も2人応援に駆けつける中での開催となりました。観察会の概要をご報告します。

開催日時：2014年5月18日（日）
9時30分～13時00分
（終了後カフェで有志にてお茶会を開催）
天候：晴れ
参加者：約25名
リーダー：約5名

■当日の様子

開催場所は宇都宮市の中心部にある都市公園、栃木県立中央公園。車を持っていない若者が参加できるようにとの配慮から、駅からバスで一本という場所での開催でした。

公園の入り口にはプラカードを持ったスタッフが立っており、その案内で集合場所の広場に向かいました。初めに集まって来たのはスタッフの顔見知りの方が中心のようでしたが、次第に、新聞や facebook を見たという一般の方が増え、10代後半～30代を中心に25名ほどになりました。

今回の観察会のリーダーは、日本野鳥の会栃木のメンバーと宇都宮大学探鳥会サークルの学生がつとめていました。

まず中心となって準備を進めてきた栃木の長野さんから、開会の挨拶がありました。

「第一回目のユース観察会に集まってくいただきありがとうございます。鳥だけでなく植物や昆虫などにも注目する自然観察会です。リーダーは鳥以外には詳しいわけではありませんので、気になる生きものを見つけたらぜひ教えてください。また、今日集まっているのは皆さん生きものが好きな方たちです。おしゃべりも楽しみながら和気あいあいと出来たらと思います。」

観察会は池の周りの並木道を歩きました。は

じめに見つけたのはカルガモ。リーダーから、「嘴の先が黄色いのが特徴です。3羽いますが、雌雄はわかりますか。」

と投げかけがあり、参加者皆で3羽の違いを探しました。

樹木があると、リーダーは樹木に詳しいという参加者の大学生に説明を依頼。大学生が、ユリノキの特徴的な葉の形やカツラの生育環境について説明していました。

また、参加者の中には、生きもの全般に詳しいという方もおり、率先して、昆虫や草本の説明をしていました。

リーダーと参加者が同世代であることで、リーダーと参加者の距離が近くなり、参加者も気軽に解説に参加するという雰囲気生まれていたようでした。



▲和やかな雰囲気の観察会

観察会の後はケヤキの木の下で昼食をとり、スタッフが用意してくださったお菓子や飲み物をいただきながら、観察した生きもの振り返りや参加者同士の交流の時間となりました。



▲交流の時間に、リーダーが観察会で見られた生きものを紹介

■参加者の声

以下は探鳥会に参加しながら雑談の中でお聞きした参加者のお話です。

6ヵ月の女の子を連れてお母さん：会員ではありませんが、自然が好きでこれまでもときどき探鳥会に参加していました。子どもが生まれてからは、子どもの鳴き声が迷惑になってもいけないし、舗装されていないとベビーカーが押せないで、足が遠のいていました。今回は栃木の方に声をかけていただき、参加しました。また参加できるものが出来て嬉しいです。

30歳くらいの女性：鹿沼市から2時間程かけて来ました。自然が好きで大切にしたいと思

っていましたが、なかなか周りに話の合う人がいませんでした。新聞で自然好きな若い世代が集まる場だと知り、共通の話が出来るかなと思い参加しました。とても楽しかったです。

30歳くらいの女性：2、3年前から庭の巣箱に来るシジュウカラを観察するようになり、野鳥が可愛いと思うようになりました。探鳥会は親世代のイメージがあったので、参加しづらく、1人で図鑑を見ながら勉強していました。新聞で若い人の向けの会だと知り、参加しました。

■まとめ

栃木では、「ユース観察会」だけでなく、生きものや自然のことについて室内でおしゃべりする場である「ユース交流会」も始まりました。「観察会」と「交流会」を合わせて、「栃木ネイチャーコミュニティプロジェクト」と呼んでいます。その中心メンバーの長野さんは、東京のYoung探鳥会で見たという、中学生、高校生、大学生が友だちのように鳥の話で盛り上がっている様子がとても刺激になったそうです。将来的には栃木でもそんな光景が見られるよう、今後は高校や他大学への広報にも力を入れ、また、観察会に限らず子ども向けの野外イベントも開催しながら、プロジェクトを盛り上げていきたいと話していました。

(普及室／堀本理華)

◆トコロジストになろう

第3回「子どもとトコロジスト」

日本野鳥の会兵庫県支部が設立された33年前、私（丸谷）は高校生役員として多くの先輩たちにお世話になりました。

今振り返ると、野鳥のことはもとより人として正しく生きていくために大切なことをたくさん教えてもらったように思います。その恩返しを込めて昨年6月より「ひょうご」の代表をさせていただいています。

■明石のはらくらぶ

子どもが生まれてからの20年程は、なかなか遠出もできず支部活動にも参加できませんでした。

ただ、住まいのある明石市西部は、農地やため池が点在し、南は明石海峡とまだまだ豊かな自然が残っている地域で、そのよさを知ってもらうために主婦グループで小さな活動をしてきました。

子育てをしながら、身近な自然（野鳥）観察を楽しんでいるうちに地域や行政、専門家とだんだんつながりも広がっていき、気づいたら小学校での環境学習の支援を依頼されるようになっていました。

何年か続けるうちに教育機関での環境学習支援を中心に身近な自然を通して人の輪をつなげようと「明石のはらくらぶ」という市民グループが生まれました。まさしく、地域の自然を愛するトコロジスト集団です。

スタッフの多くは、子育て中の自然大好きおばちゃん。私は、のはらくらぶの活動を続けながら、ひょうごの代表もお引き受けしているというのが現在の状態です。

今回は、「子どもとトコロジスト」というテーマですので、のはらくらぶで取り組んでいる究極のトコロジスト活動「未来のリーダー集まれ！放課後自然たんけん隊」についてご紹介させていただきます。

■放課後自然たんけん隊

兵庫県は、2009年度から県下全公立小学校3年生が、一年を通して身近な自然の中で五感を使って、小さな命の存在に気づく環境体験学習を実施しています。

私たちも地域支援者として、主に自然体験の

支援をしています。毎年千人を超える子どもたちに出会うのですが、その中には、自然に対する感性が素晴らしい子に出会うことがよくあります。かくいう私もそのような子どもだったので、「あっ！この子は・・・」と感覚でわかってしまうのですが、この子とずっと関わって育てたいと思ってても学校教育の中では、学年が変わればそれでおしまいになってしまいます。

そこで、自然大好きな子どもたちとずっと繋がっていきける方法はないかと考えに考え、思いついたのが、5限目で終わる火曜日の6限目の時間に私たちが学校に出かけていき、校庭で自然観察をする「放課後自然たんけん隊」プランでした。



▲放課後の校庭で葉っぱのステキくらべをするジュニアリーダーたち

こんな思いを明石市立鳥羽小学校の校長先生にお話したところ、うちでやってみたらいいと言ってもらい、さらには、校長名でお手紙を出して保護者に呼びかけてくださいました。

保護者の了解はとりますが、子どもの意志で参加できる場として、毎月1回開催し、今年で4年目になります。3年生以上に限定しているのですが、毎回50名を超える参加があり、私たちだけではとても対応しきれません。

そこで、高学年の子どもたちにジュニアリーダーになってもらい、下の子の面倒をみながら、活動を進めるスタイルが出来上がりました。

今では、5・6年生のジュニアリーダーたちにその日の活動を任せています。始めに大人スタッフとジュニアリーダーで打ち合わせし、そ

の日のテーマや大体の内容を決め、後は、大人は安全面の配慮や写真撮影等を担当する程度です。

鳥羽小学校は、西明石駅に近く、住宅地に囲まれ、決して自然が多い地域ではありませんが、校庭の中には、渡り途中のサンコウチョウがやってきたり、溝をさらうとギンヤンマのヤゴが見つかったり、毎回新たな自然の仲間との出会いや発見があります。子どもの感性は、すばらしくて大人が見つけれられないような自然を心と身体で感じてくれています。

いつの頃からか鳥羽まちづくり協議会や小学校の先生、行政、専門家など多くの方がサポートしてくれるようになりました。

さらに、自然にふれて成長している子どもたちの姿を目の当たりにした地域の方と校長先生が、学校の中に樹木を植えることを提案してくれました。

そこで、どんな樹を植えるのか？どんな場所にしたいか、子どもたちで考えてイメージ図を描き発表しました。

すると「チョウや野鳥が好きな木を植えて、いろんな生きものがくらせる場所にしたい」

「いいにおいのする木を植えて、地域の人にも喜んでもらいたい」「ドングリなど、自然あそびができる木を植えて、1年生にも自然が大好きになってもらいたい」と・・・みんな自分のためではなく、生きもののため、地域の人のため、後輩のために未来の校庭を創造・想像して

いました。

■地域に根ざしたトコロジスト活動を！

自発的に考え、行動しようとしている子どもたちの姿に大人は驚き、感動で胸がいっぱいになりました。おかげで、いろいろ難関はあったのですが、地域の方が全面的に動いてくださって今年2月に「とばっこガーデン キキ」（←子どもたちで決定）が誕生しました。

最近では、「ぼくたち、けっこういいとこに住んでいるんやなー」という声がよく聞かれます。こうした経験からも、子どもたちにとって、身近な自然の存在に気づき、関心を持つはじめの一歩として地域に根ざしたトコロジスト活動が何より大切だと実感しています。

今では形態は様々ですが、明石市立大観小学校、花園小学校、赤穂市立赤穂小学校アフタースクールの4カ所で実施しています。

ぜひ、各支部の探鳥会スタッフみなさんも学校とつながりながら地域にくらす自然の仲間の存在に気づく活動を広げていただけたらうれしいです。このような子ども向けトコロジスト活動が一つのモデルとして全国に広がるといいなーという夢を描いてこれからもがんばりたいと思います。

（日本野鳥の会ひょうご代表／丸谷聡子）

◆マナー問題の事例

「東京港野鳥公園のミヤマシトドの例」

【キーワード】 珍鳥、公共の施設、施設スタッフによる対応

2013年4月、東京都大田区の都立東京港野鳥公園にミヤマシトドが飛来した時の事例をご紹介します。

東京港野鳥公園は、東京都大田区の東、東京モノレールの流通センターより東へ約1キロのところにあります。

開園当初より、当会が運営に関わり、現在も職員を配置し、来訪者への自然解説や安全管理を進めています。

1989年に開設。これまで216（2014年4月1日現在）種類の野鳥が観察され、年間約38,000人が訪れています。数年に一度、シベリアオオハシシギやタカサゴモズ等、いわゆる珍鳥が訪れます。

この珍鳥たちが、様々なメリットやデメリットを発生させるのです。

まず、メリットは、たくさんの方に珍鳥を観察できる機会を与えてくれることです。一方で、デメリットは、やはりマナーの問題です。

数少ない観察窓を、撮影者が長時間使用することで、他の撮影者やお客様が観察できなくなる。休憩用の椅子に、撮影機材等を長時間置くことで、他のお客様が利用できなくなる。カメラから離れると場所を取られると考えるのか、近くで立小便をする者もいます。本来禁煙の場所なのに、吸殻が落ちていることもあります。

不幸中の幸いと言って良いのかわかりませんが、野鳥公園の中なので、地域住民に迷惑がかかることがないことは救われます。

もちろん、マナー違反をしている方への注意や、お客様からのクレームは、野鳥公園のスタッフが対応し、最小限で済むようにしています。

2013年にミヤマシトドが飛来した時は、あっという間に噂が拡がり、1日1,000人に及び撮影者がやってきました。姿を現す場所が、

あまり広い場所ではなかったため、まずは、ミヤマシトドを追い回さないように、ロープを張り、立ち入り制限をしました。その後、撮影者間で場所取りの問題が発生しそうでしたので、梯子の目のように、15メートル×4メートルの枠をロープで作り、ミヤマシトドが一度出現し、撮影したら、その枠の中の方は、一番後ろの枠に移動。2番目の枠の方が前に移動し、撮影したら、後ろに移動するというルールを決め、スタッフが交通整理しました。



▲レンジャーが交通整理をしている。数日経って落ち着いてきたころなので、人数も減少してきている

朝早くから門の前で待っていた方は不満そうでしたが、公共の施設なので、このようなルールの下で、撮影を楽しんでもらいました。

この事例のポイントは、野鳥公園という公共の場所だったため、地域住民に迷惑が掛からなかったこと。施設のスタッフが、野鳥への影響が出ないように、かつ、撮影者に不公平にならないように機会を提供し、より多くの方に楽しんでいただけたことです。

ただ、仕事とはいえスタッフはたいへんだったようです。ミヤマシトドが滞在した約10日間は、開園時間の9時～5時まで、交代で撮影者の整理に当たりました。また、クレームや嫌味を言われることもあったようです。

（普及室／富岡辰先）

◆探鳥会保険集計結果（2014年4月分）

4月は63支部からご報告をいただき、計267回の探鳥会が開催され、のべ6,694人が参加されました。

表1. 4月の探鳥会保険集計結果（2014年5月15日現在）

支部	開催回数 (回)	参加者数		スタッフ数 (人)	合計人数 (人)
		会員(人)	非会員(人)		
小清水	-	-	-	-	-
オホーツク支部	2	29	26	2	57
根室支部	-	-	-	-	-
釧路支部	2	23	22	5	50
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	-	-	-	-	-
旭川支部	1	17	1	1	19
滝川支部	1	9	1	2	12
道北支部	1	0	2	1	3
江別支部	-	-	-	-	-
札幌支部	3	122	72	9	203
小樽支部	2	7	3	2	12
苫小牧支部	-	-	-	-	-
室蘭支部	1	27	15	7	49
函館支部	-	-	-	-	-
道南檜山	2	24	20	11	55
青森県支部	-	-	-	-	-
弘前支部	3	36	3	3	42
秋田県支部	4	47	4	4	55
山形県支部	4	30	15	4	49
宮古支部	-	-	-	-	-
もりおか	1	14	12	4	30
北上支部	-	-	-	-	-
宮城県支部	3	59	14	7	80
ふくしま	2	42	0	3	45
郡山支部	3	33	2	9	44
二本松	1	7	0	2	9
白河支部	1	7	10	1	18
会津支部	-	-	-	-	-
奥会津連合	-	-	-	-	-
いわき支部	1	20	4	1	25
福島県相双支部	-	-	-	-	-
南相馬	-	-	-	-	-
茨城県	10	118	71	14	203
栃木	-	-	-	-	-
群馬	8	92	18	23	133
吾妻	2	29	3	3	35
埼玉	8	254	69	62	385
千葉県	10	183	51	46	280
東京	14	568	14	68	650
奥多摩支部	14	248	18	51	317
神奈川支部	11	205	51	42	298
新潟県	-	-	-	-	-
佐渡支部	-	-	-	-	-

富山	3	70	37	5	112
石川	2	55	6	6	67
福井県	1	14	0	2	16
長野支部	6	108	32	12	152
軽井沢支部	1	16	16	1	33
諏訪	2	14	27	4	45
木曾支部	-	-	-	-	-
伊那谷支部	-	-	-	-	-
甲府支部	2	53	1	4	58
富士山麓支部	-	-	-	-	-
東富士	-	-	-	-	-
沼津支部	3	31	9	5	45
南富士支部	1	30	8	2	40
南伊豆	1	4	6	2	12
静岡支部	5	29	0	9	38
遠江	4	75	11	13	99
愛知県支部	16	149	186	39	374
岐阜	-	-	-	-	-
三重	4	50	9	7	66
奈良支部	4	91	0	8	99
和歌山県支部	1	4	4	5	13
滋賀	4	35	13	8	56
京都支部	6	100	17	12	129
大阪支部	23	417	99	96	612
ひょうご	8	104	122	23	249
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	22	9	3	34
島根県支部	2	18	3	2	23
岡山県支部	6	127	69	20	216
広島県支部	3	38	24	3	65
山口県支部	2	11	3	2	16
香川県支部	2	47	12	3	62
徳島県支部	5	57	9	5	71
高知支部	-	-	-	-	-
愛媛	6	62	37	10	109
北九州	2	33	3	2	38
福岡支部	5	122	12	11	145
筑豊	5	43	16	5	64
筑後支部	-	-	-	-	-
佐賀県支部	3	29	23	3	55
長崎県支部	-	-	-	-	-
熊本県支部	5	127	52	11	190
大分県支部	1	18	10	1	29
宮崎県支部	2	7	7	2	16
鹿児島	3	59	21	8	88
やんばる支部	-	-	-	-	-
石垣島支部	-	-	-	-	-
西表支部	-	-	-	-	-
全国	267	4,519	1,434	741	6,694

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

(普及室)

◆普及室からのお知らせ

■ツバメのねぐらアンケートを実施しています！■

現在、普及室では全国の支部等連携団体に「ツバメのねぐらアンケート」へのご協力をお願いしています。このアンケートの目的は、主に非会員、バードウォッチング初心者の方を対象にした「ツバメのねぐらマップ」制作のための情報収集です。

ツバメは、バードウォッチング未経験者の方にも関心の高い鳥です。今の時期、駅の構内などでツバメの親鳥が巣の中のヒナに餌を運びこむのを通行人の人が熱心に見ている光景もときどき見かけます。

ところが、巣立ったあと渡りまでの間、市街地を離れて大規模なねぐらを形成していることはほとんど知られていません。

ツバメのねぐら観察は、ツバメの暮らしを知る上でも興味深いテーマですし、なによりも数万羽規模のツバメが一斉に集まってくる様子は壮観であり、身近な自然に目を向ける良いきっかけになるものと思います。

そこで、先の「ツバメのねぐらマップ」を制作し、全国の主なねぐらを一般の方に紹介していきたいと考えています。

アンケートは、現在 11 支部から回答をいただいております、その中には 5 万羽のツバメが集まるねぐらも報告されています。今月中には結果を取りまとめ、大規模なねぐらについては詳細を、7 月になってから直接メールや電話で問い合わせさせていただこうと思っております。そのときはどうぞよろしく願いいたします。



(普及室／箱田敦只)

■新たな『フィールドガイド日本の野鳥』に向けた増補改訂新版の取り組み■

◇高野図鑑の良心

『フィールドガイド日本の野鳥』以後、掲載種の多さを誇る図鑑や細かな識別点まで扱った中上級の図鑑が発行されるようになりました。が、それらの多くが「十分な観察ができなかった場合やよく似た種がいる場合は、種を決められないことが多いこと」に触れていません。高野伸二は「野鳥の見分け方」で・・・野外での鳥との出会いはさまざまです。いつでもすべての鳥の名が判るとは限りません・・・と書き、最後はこうくくっていました・・・良識ある野鳥観察家は、いつでも見分けられるものではないことをよく知っていて、十分に見ることでできなかった場合には、はっきりと鳥の名は言いません・・・高野図鑑が信頼され、良心的と評される理由の一つでしょう。

増補改定を担当した私は高野の意図を引き継ぎつつ、「野鳥の見分け方」に次のように書き足しました・・・大事なことは、種を決めることではない。印象や限られた情報で種を同定

するのは誤りの元。よい条件で、さまざまな姿勢や角度で確認できた特長を記録することが第一歩だ・・・当会ホームページ (<http://www.birdfan.net/bw/fg/index.html>) でも読めるようにしてありますが、写真 1 枚を送りつけてきて「種を決めてくれ」という依頼が少なくありません。類似種がいる場合は、その可能性を否定するために細部にわたる総合的な検討が必要であり、ワンカットで種を決められることは少ないのです。

◇新たな記録の例と図鑑の対応

4 月に発行された日本鳥学会誌 63 巻 1 号に、トカラ列島でのクロビタイハリオアマツバメの観察記録が掲載されました。現在取り組んでいる『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版での扱いを検討した種ですが、新版では、図版入りで新たに扱うのは、アマツバメ科ではヒマラヤアマツバメに絞りました。

クロビタイハリオアマツバメは日本鳥類目録改定第7版では掲載種ではなく「検討中の種・亜種」というカテゴリーであったこと、各地で頻繁に見られる可能性は低いこと、上空を高速で飛ぶことが多く野外識別が簡単ではないことなどに鑑みた結果です。ヒマラヤアマツバメも簡単に識別できるわけではありませんが、目録7版で掲載種となったこと、その記録が北海道から南西諸島に及ぶことから重視した次第です。

ただしクロビタイハリオアマツバメも、今後の目録8版では掲載種となるかも知れません。学会誌の観察記録では、亜種については分布域から可能性について触れるに留めていますが、記録が増え、亜種の検討が進むこともあるかもしれないし、目録7版で掲載種の新たな考え方が示されたためです。曰く「亜種を特定できない場合でも、種として確認できれば掲載種とする」で、実際に目録6版までは亜種が特定できないために「検討中」とされてきたヒメモリバトやオウチュウカッコウ（『フィールドガイド日本の野鳥』では増補版で増補）などが、目録7版ではめでたく（？）掲載種になりました。

同学会誌には、ニシオジロビタキの観察記録も掲載されました。高野が『フィールドガイド日本の野鳥』の図版を描いた頃はオジロビタキとして一くりにされていたのですが、増補改定版の際には観察例が多いニシオジロビタキを新たに図示しました（P335）。解説ではニシオジロビタキはオジロビタキの亜種という見解に基づいて補足程度にしてありますが、今後、観察記録の蓄積や検討が進むことで、目録8版では別種として扱われるかも知れません。

◇新版の進捗

「野鳥は何種いる？」が簡単でないことはおわかりいただけたと思いますが、増補版以降、何種？を記すための参考文献としてきた『Checklist of the Birds of the World』のズメ目の刊行がずれ込んでいることが、春の発

行を目指していた新版が遅れている一因です。昨年11月の予定が今年6月とされたことまでは書きました。最新の情報で、さらに遅れる見込みであることが判明しました。

世界的に広く用いられている鳥類リストはDickinsonによる『Checklist of the Birds of the World』以外には現在ウェブ上にしかなく、それらを参考文献とすることは見送りました。ひとつはIOC World Bird List (<http://www.worldbirdnames.org/>) ですが、インターネット上での公開のため更新頻度が早く、書面としては残されません。今ひとつはClementsによるリストで、2007年に書面化された第6版以後はインターネット上 (<http://www.birds.cornell.edu/clementschecklist/>) で、更新頻度は年1、2回のようなのですが、やはり将来的に参照をする際に不安が残るという観点から見送りました。が、夏の発行も厳しくなり、先が見通せない今、『Checklist of the Birds of the World』をいつまで待てるか？ 秋までに新版を出すにはどうしたらよいか？

再度検討することに致します。



▲ニシオジロビタキ

増補改定の際、谷口高司さんにヒタキ科の補足として新たにオジロビタキを描いてもらった図は、下嘴や上尾筒が黒くないなどニシオジロビタキの特徴とした

(普及室／安西英明)

◆今月の購読者数

探鳥会スタッフ通信6月号の電子メール版の購読者数は、先月から12名増えて695名です。支部ごとの購読者数は以下の通りです。

表2. 探鳥会スタッフ通信6月号電子メール版の購読者数(2014年6月19日現在)

支部	購読者数	支部	購読者数
小清水	0	福井県	10
オホーツク支部	7	長野支部	2
根室支部	0	軽井沢支部	2
釧路支部	2	諏訪	4
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	70	木曾支部	0
旭川支部	4	伊那谷支部	1
滝川支部	1	甲府支部	1
道北支部	1	富士山麓支部	0
江別支部	0	東富士	0
札幌支部	4	沼津支部	3
小樽支部	0	南富士支部	2
苫小牧支部	1	南伊豆	2
室蘭支部	4	静岡支部	3
函館支部	0	遠江	5
道南松山	1	愛知県支部	33
青森県支部	1	岐阜	2
弘前支部	4	三重	3
秋田県支部	1	奈良支部	1
山形県支部	3	和歌山県支部	2
宮古支部	0	滋賀	19
もりおか	2	京都支部	131
北上支部	0	大阪支部	5
宮城県支部	6	ひょうご	5
ふくしま	2	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	11
郡山支部	1	島根県支部	2
二本松	1	岡山県支部	23
白河	1	広島県支部	6
会津支部	2	山口県支部	2
奥会津連合	0	香川県支部	3
いわき支部	0	徳島県支部	4
福島県相双支部	0	高知支部	1
南相馬	0	愛媛	14
茨城県	20	北九州	12
栃木	45	福岡支部	12
群馬	23	筑豊	1
吾妻	1	筑後支部	6
埼玉	18	佐賀県支部	3
千葉県	15	長崎県支部	0
東京	44	熊本県支部	5
奥多摩支部	46	大分県支部	2
神奈川支部	9	宮崎県支部	2
新潟県	1	鹿児島	1
佐渡支部	0	やんばる支部	0
富山	1	石垣島支部	0
石川	5	西表支部	2
		合計	695

(普及室)

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）
ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアド

レス）を記入し、tancho-staff@wbsj.orgへお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.orgまでお知らせください。

★編集後記

栃木のユース観察会では、宇都宮大学探鳥会サークルの学生もリーダーをしていましたが、その1人は、静岡県出身で、子どもの頃は南富士支部でお世話になっていたそうです。今月初めに開催された中部ブロック会議では南富士支部の方にお会いすることが出来、皆さん活躍を喜んでいました。

6月号では、青森県やひょうごから記事をいただきました。ありがとうございました。

（普及室／堀本理華）

日本野鳥の会

探鳥会スタッフ通信 第15号

◆発行

(公財)日本野鳥の会 2014年6月20日

◆担当

普及室 普及教育グループ

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

TEL : 03-5436-2622

FAX : 03-5436-2635

E-mail : tancho-staff@wbsj.org
